

令和元年5月27日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2018

課題番号：26360061

研究課題名（和文）時空を越えて広がる楽園イメージと観光開発の比較社会学：ハワイと沖縄を中心に

研究課題名（英文）The Comparative Sociology on Paradise Images and Tourism Development Spreading beyond Time and Space: Focusing on Hawaii and Okinawa

研究代表者

多田 治（TADA, OSAMU）

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：80318740

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では沖縄観光の歴史を、ハワイや宮崎の楽園・南国イメージからの連続性において把握した。だが先住民の位置づけでは、ハワイは沖縄より北海道に近く、また開発の面で北海道は沖縄の先駆的モデルでもあったため、その観光史を検証した。開発の枠組みから観光が成長した北海道のプロセスを、復帰後の沖縄は継承している。エリア横断的かつ長期の歴史から、観光を切り口に社会をとらえる視点と手法を練り上げた。また、こうした観光史をより一般の社会的文脈に位置づける作業にも取り組み、旅や移動が近世～近代の日本の国家形成に重要な役割を果たしてきた歴史を理解する地平にまでたどり着いた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

観光やイメージは、社会をとらえる知識作用の一環でもある。観光を知識・認知の観点からとらえなおすことには重要な意義がある。世界遺産の認定を受け、映画やアニメのロケに使われるなど、場所の知名度・認知度が高まることは、その地の威信や地位を高める「象徴資本」となり、観光客や売上の増加による経済資本にもつながる。ブルデューの象徴資本概念は、いまだ十分に理解・活用されておらず、このように観光の局面に具体的に活用することで認識効果も高まる。実際に観光は、物理的な風景・場所・対象を主観的に知覚し、同時に価値評価や好悪感情を付加する営みであることからしても、象徴資本の観点でとらえることが適切な現象なのである。

研究成果の概要（英文）：I grasped Okinawa tourism history in terms of the lines from Hawaii and Miyazaki to Okinawa, because they have similar images of tropical paradise. However, considering indigenous peoples, Hawaii is more similar to Hokkaido than Okinawa. And in the aspect of development, Hokkaido had been a pioneering model for Okinawa. Hokkaido tourism expanded from the frame and context of development. Okinawa after 1972, its reversion to Japan, inherited that process from Hokkaido. Hokkaido has much longer process of tourism than Okinawa. We can understand tourism development history totally by overlapping both areas. Through cross-areas and long history, I deepened the perspective for understanding society in terms of tourism. Furthermore, I also worked on positioning such a tourism history into wider social contexts. I reached the horizon of understanding the history when travel and movement had taken an important part in the formation of nation-state in the early modern and modern Japan.

研究分野：社会学

キーワード：観光 沖縄 イメージ ハワイ 北海道 開発 象徴 歴史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

国内では近年、学術的な観光研究は急速に活性化し、社会学・人類学・地理学等で研究成果の蓄積が進んだ。海外ではより以前から、ビジネスと学術の両方の立場から、観光研究が行われてきた。特にハワイやバリなど、観光を基幹産業とする場所では、歴史・産業・文化等の研究でも、観光は不可欠な要素とされた。ただし、こうした国内外の観光研究の多くは、一つの地域・事例を掘り下げるとどまり、地域間の比較や影響関係を問うまでに至っていない。

これまで筆者は沖縄を主な対象とし、1970年代の日本復帰・海洋博以降の観光立県と「青い海」「亜熱帯」等の沖縄イメージの形成、さらには戦前期からの沖縄観光・イメージの通史などを研究してきた。だが近年、ハワイやグアム、サイパンなど、太平洋のリゾート地にも目を向ける重要性を認識した。戦地・基地となった場所が観光地化された点で、これらの島々と沖縄は共通している。特にハワイは、アメリカ本土にとって太平洋の軍事拠点となる中で急速に観光地化し、「太平洋の楽園」の先駆的なモデルとなった。筆者は沖縄研究を継続しながら、ハワイと沖縄の比較研究を導入し、観光やイメージ形成において両地域間の影響関係をさぐっていく。実際、復帰後の沖縄の急速な観光立県と楽園イメージ形成を理解するには、沖縄単体より、ハワイや宮崎からの流れを見たほうがより豊かな知見が得られる。海外と国内、両方の流れや関係性の中に沖縄を置きなおすことで、相互影響や並列化を観察し、立体的な把握ができる。

観光地としてのハワイと沖縄の関係について、新たな知見を示しておく。まずベトナム戦争期のハワイと沖縄が、ともに戦士の休息地になった点で、復帰前1960年代の沖縄が、米兵たちのミニハワイの役割を果たした点は、観光立県の前史として重要である。次に、「青い海、白い砂浜、灼ける太陽、ピキニの女性」という舞台装置による復帰後沖縄のリゾート化が、海外旅行先としてのハワイやグアムの定番化とも時期的に重なり、競合関係におかれた点だ。米軍統治下で「海外」だった沖縄へは、海外旅行の自由化より前に渡航を認められた。1960年代後半の沖縄ブームも、ハワイ・グアムの伸びと重なるが、当時はまだ戦跡・基地のリアリティが強かった。実際、観光関係者は当時、沖縄を「日本のハワイ」へ押し上げたがっていた。

1970年代の復帰と海洋博を経て、沖縄が純粋に「ビーチで肌を焼きに行くところ」として定着するのは、宮崎から「国内新婚旅行のメッカ」の地位を奪取した1977~79年である。国内・海外ともに、「海・砂浜・太陽・ピキニ」の舞台の主役を、新婚カップルは演じた。沖縄はハワイ・グアム・サイパン・タヒチなどと並立し、互換的になることで、南九州との差異を決定的にした。こうした流れは、単に観光空間の形成・変容を表すだけでなく、それが日本人の身体感覚やライフスタイル、消費様式の変容、若者(特に女性)のツーリズムや結婚・性の変容などとも密接に結びついていた点で、観光学とともに社会学・文化研究等の見地からも、細かく明らかにしていく意義・価値のある研究課題である。

2. 研究の目的

2013年7月~14年8月の期間、ハワイ大学客員研究員となる立場を活用し、同大学図書館等で文書・映像の歴史資料の収集を行う。得られたデータをもとに、ハワイの観光開発と楽園イメージ形成のプロセス、またそのノウハウや内容が日本・沖縄や太平洋諸島の観光において、どのように先駆的なモデルとなり影響を与えたかを明らかにする。他方で、日本を主な拠点として、国内の観光開発、およびハワイ・グアム等への海外旅行の歴史について調査を行い、伊豆・南紀・南九州・沖縄などの各観光地の南国イメージがいかに形成され、時代とともにどう変容してきたか、特に宮崎~沖縄の新婚旅行ブームの時期、ハワイ・グアムのブームと重なり並立したことで、国内と海外の観光のあり方や楽園・南国のイメージが相互に作用し、変容したプロセスを明らかにする。時期的には1960~90年代を中心とする。旅行・交通業界やメディアが観光・楽園イメージを開発・生産・提供してきたプロセスと、旅行者・観光客がそれらを受容・消費・享受してきたプロセス、両面を意識的に見て関係づける。

3. 研究の方法

(1) 2014年度は、基礎的な文書・映像資料の収集・整理・読解・分析を中心に作業を行う。可能かつ必要なところから並行して、関係者へのアプローチ、導入的な聞きとりを進めておく。

ハワイ大学研究員の立場が8月までなので、8月まではハワイで行える作業、9月からは日本国内で行える作業を優先し、集中的に特化する形になる。主にハワイと沖縄の資料を集めながら、並行して海外ではグアム・サイパン・タヒチ、国内では宮崎・奄美諸島・南紀・伊豆・熱海などの観光開発と南国イメージ形成に関する資料も集め、地域間の比較や影響関係・並列化の把握、旅行・ホテル・航空等の業界の各地への活動展開、観光とメディア、観光と移住の影響関係の把握、一般化・理論化のためのデータを確保し、調査研究の視点を構築していく。

文書資料としては、旅行者の動きや主観を把握するには一般向け雑誌、旅行雑誌(投稿欄を含む)旅行ガイドブック、新聞等が有効である。各地への旅行者数の増減や消費動向の把握には、日本交通公社や政府機関等による統計データを使用する。観光サービスの生産者側の動向を把握するには、旅行・ホテル・航空等の各業界の専門誌紙、社史、各地域のローカル雑誌・新聞の記事、旅行ガイドブック、各地の観光協会の資料、行政資料などが活用できる。もちろん、各地・関連テーマに関する先行研究の収集・読解も、必要な作業である。

(2) 2015年度以降は、2014年度の成果を基礎に、国内に拠点を置きつつ調査を継続していく。

ハワイと沖縄を中心に作業を進めながら、並行して他地域の掘り下げや関連づけも進める。

年度・調査が進むにつれて、それまで個々の地域・事例に即して集めてきた資料・データを、互いに関係づける作業へと重点を徐々にシフトし、地域間の比較、影響関係、並立化の検討を進め、全体として体系的な研究にまとめあげていく。こうした作業の中から出てくる不明な点・不十分な点に関して追加調査を実施し、データを補足していく。

随時、学会や研究会、シンポジウムで研究成果報告を行い、そこで得られたフィードバックを反映させ、論文や単行本にまとめていく。

4. 研究成果

(1) 1年目・2014年度：8月まではハワイ大学研究員として、現地で行える資料・情報収集やフィールドワークに力を注いだ。拠点のオアフ島だけでなく、マウイ島・ハワイ島にも足を運び、島ごとの観光開発やイメージ形成の多様な歴史を把握した。また、本研究と直結する"Paradise Project"の成果として英語で論文を書き、1960-70年代の新婚旅行ブームにおける宮崎・ハワイ・沖縄の関係についてまとめた。その執筆・追加調査・修正稿の作業には7月まで時間を要した。11月にはその内容をもとに、日本社会学会大会で成果報告を行った。8月下旬の帰国後、比較や観光化の裏面を見るため水俣・福島で聞きとり調査を行い、2月にその成果を出版用に文章化した。また、沖縄の観光・社会変容の実態を知るため、9月と1月末に宮古・伊良部島と八重山諸島でフィールドワークを行い、新たに完成した伊良部大橋や石垣新空港の効果や影響などについて、現地の関係者に詳しく話を聞いた。11月下旬からは観光関連の講義を行う場を活用し、観光研究の視角と手法を新たに深化する作業に取り組み、日本では特に戦前と戦後の断絶と連続性に留意して研究を進めることの重要性を見出した。その関連で、3月には台湾で調査を行い、日本統治時代の台湾観光やその南国イメージ、日本人の間で流行した温泉観光、台湾の多民族性などについて認識を深めた。これをふまえて研究代表者は、日本の観光の長期の歴史をよりトータルに把握する必要性を自覚し、戦前からの国立公園の歴史や、戦前の植民地観光から戦後の北海道観光への流れに関心を向け始めた。北海道という新たな切り口・対象が浮上したことで、北海道と沖縄という南北の両極の関係性のなかで、沖縄を位置づけなおして考える射程を獲得できたことは、大きな成果であった。

8月までのハワイ大学研究員の立場と、その後の日本での研究、両方の時期を存分に生かして、研究目的を存分に達成することができた。沖縄単体でなく、沖縄と他地域との関係づけを志向する本研究の目的からして、実際に沖縄そのものの深化と、宮崎・ハワイ・水俣・福島・台湾・北海道などの地域それぞれの調査研究の両方を行い、それらの関係づけを行う中から、日本の観光の歴史を記述するための構想を具体化し、その中に沖縄を新たに位置づけなおす射程が得られた。その成果は当初の予想を上回り、実に得るところが大きかった。

ハワイに研究員として滞在できたのは短期間に限られ、充分ではなかったが、その後の日本での研究に豊富で柔軟な着想・ヒントを得ることができたのである。例えば、ハワイが観光地化されるまでには、アジアからの移民をプランテーション労働に導入するプロセスがあったが、その背景には、もともといたハワイアン先住民が、環境の変化により激減したことがあった。この状況を日本に適用して考えれば、ハワイは沖縄よりもむしろ、北海道と通じる面が大きい。北海道も明治からの近代化のなかで、開拓～開発の流れをたどり、そのなかで観光も伸びてくる。北海道におけるこうした開発と観光の関係は、復帰後の沖縄にもモデルとして応用されることになる。このような新しい視座と今後の展望は、当該年度に切り開かれた貴重な成果であり、当初の計画を越えて研究が進展したことを表している。

(2) 2年目・2015年度：本研究と直結するパラダイス・プロジェクトの成果として、6月にハワイをテーマにしたパネルディスカッションを開催、新婚旅行ブーム期の宮崎・ハワイ・沖縄の関係について報告と議論を行い、有意義な視座が得られた。同内容の英語論文は最終作業を経て、1月に海外査読誌に掲載・ウェブ公開された。日本語でも大学紀要に執筆、掲載された。

2014年度末に、ハワイ・沖縄の南国観光を考える上で、日本の観光の長期の歴史をよりトータルに把握する必要性を自覚し、国立公園の歴史や、戦前の植民地観光から戦後の北海道観光への流れに重要性を見出していた。北海道と沖縄という南北の両極の関係性の中で、沖縄を位置づけ直す射程である。そこで2015年度前半は、北海道の観光史を検証し、沖縄研究の知見との接続・比較を行い、9月の日本社会学会大会で報告した。本格的なりゾート化が日本復帰後以降と後発型の沖縄に対し、早くから観光地化した北海道の経緯を重ね、長期の観光の歴史を把握できた点が意義深い。また戦後の北海道観光は、戦前の植民地観光を別の形で受け継いだ面をもつことから、「内国植民地」としての北海道と、当時の「観光アイヌ」の位置づけを問い、観光研究に植民地・力関係・先住民などの問題圏を組み込めた。これは、南国ハワイが沖縄より北海道に近い一面であり、ハワイアンとアイヌという先住民が、入植者の流入とともに激減・衰退を強いられながら、観光の文脈へと包摂・特化され、両地に固有のエスニックな特色の演出・誇示に利用された点である。

後半期は以上の知見をふまえ、こうした観光のプロセスをとらえるための歴史的・地理的・理論的パースペクティブを掘り下げる作業を行い、グローバルな奢侈や消費の歴史の中に楽園観光を位置づけ直す必要性・意義に到達した。また2月・3月には、広島と中国揚州でフィールドワークと聞きとり調査を行い、沖縄との比較の知見を深められた。

新婚旅行ブームからみた宮崎・ハワイ・グアム・沖縄の比較・影響関係については、英語と日本語の両方で論文を発表でき、これまで数回行った国内外での発表でも、多くの反響を得ている。1960-70年代を中心としたこの研究を、日本の観光の長期の歴史のなかに位置づけ、より全体的な把握へ向かう必要を感じていた。そこで浮上したのが戦前・戦後の北海道であり、それは戦前期の植民地との連続性、ハワイとの類似性をもつ。北海道の観光史・開発史を詳しく見ていくことで、沖縄・宮崎・ハワイという「南国」の観点だけでなく、「北と南」という日本列島の両極の観点から、比較と関係づけの知見を豊かにし、強化することができた。

北海道と沖縄は、北と南で対照的であるだけではない。かつて研究代表者が『沖縄イメージの誕生』で用いた「開発・イベント・交通・観光」という4次元の枠組みは、北海道にも援用できた。特に、北海道における戦前の「開拓」から戦後の「総合開発」へと連なる流れのなかで、総合開発と観光がどういう関係にあり、開発の枠組みのなかで観光がどう伸びていったのかを見て、それを日本復帰後の沖縄の動向と重ね合わせて比較検討を行うことができた点は大きい。復帰後の沖縄における海洋博にみられたような起爆剤型開発は、それまでの北海道開発や札幌の博覧会・オリンピック等でひと通り準備された手法であり、沖縄復帰時に先立つモデルとなりえた点で、連続性をもっていたのである。このように、今回は北海道と沖縄を主要事例に設定しながら、エリア横断的な考察を広げ、戦前と戦後をつなぐよりトータルな歴史の視座から観光を研究できた。観光と非観光の諸要素（開発・イベント・都市・交通）との関係を掘り下げる作業を通して、観光を切り口に社会をとらえる視点と手法を練り上げることができたのも、オリジナリティの高い到達点にあるといえる。

(3)3年目・2016年度：これまでの沖縄・ハワイ・宮崎・北海道等の観光・イメージの研究をふまえ、2016年度中は、こうした観光開発やイメージ形成のプロセスをとらえるための理論的・歴史的なパースペクティブを掘り下げる作業に重点を置いた。観光現象を象徴・奢侈・消費・移動・越境などのグローバルで歴史的な文脈のなかに位置づけてとらえ直す視点を形成・整備する作業に取り組んだ。ゾンバルトの贅沢・消費論、エリアスの文明化・宮廷社会論、ウォーラステインの世界システム論、グローバル・ヒストリー研究、ブルデューの象徴資本論・国家論などからの知見は最終的に、ブルデューが「象徴」に与えた視座に集約できる。“象徴”は実に多義的な意味や文脈の広がりをもち、ものの見方・分け方の原理、意味・価値、名誉・威信・承認、（存在・支配等の）正当性・正統化、認知度・知名度・有名性、（言語・宗教・科学・芸術等の）文化・主観・認識の諸制度、など複数の次元・領域が重なっていることが明らかになった。ブルデューは象徴資本・象徴権力などの名詞化を通じて、自明で素通りされやすい“象徴的なもの”を、物と同等の資格をもつ対象として扱うことを促した。これにより、象徴と物、象徴資本と経済資本、主観と客観などの循環関係をとらえる認識地平が開かれた。観光はまさに象徴と物の相互作用からなり、こうした視座の応用が可能である。

以上の作業と並行して、沖縄との比較の知見を深めるために、北海道・小樽、鹿児島・知覧・指宿・鹿屋、名古屋・四日市、兵庫・宝塚等で現地調査を行い、歴史観光・戦跡観光・産業観光・コンテンツ観光などの諸実態について見聞を深め、報告書を作成した。

沖縄・ハワイ・宮崎・北海道等の楽園イメージや観光開発に関する研究は、2015年度までの時点で、当初の計画以上に進展した。2016年度は、ゾンバルトや川北稔が明らかにしたような贅沢品・嗜好品、いわゆる「象徴財」を軸としたグローバルな経済の歴史に、観光を位置づける理論的・歴史的な作業に着手した。また、エリアスの文明化・宮廷社会論やウォーラステインの世界システム論を取り入れることで、長期の歴史プロセスを見ていく視座と、個々のアクターや地域・国家をより広範囲のシステムに置き、関係性を重視する立場を手に入れられた。近年の観光研究は、特定の地域・場所のエリアスタディに特化したものが多いので、このような関係性や長期の歴史に目を向ける方向性は、まだ十分に手を着けられていない。このような理論的・歴史的パースペクティブの導入・整備は、観光研究に一定のオリジナルな貢献をなしている、意義ある作業となった。社会学・社会科学はこれまで長らく、革命・政変・戦争・外圧等による歴史の断絶を重く見すぎる傾向があった。だが今回、長期の歴史プロセスをとらえる見方を彫琢することで、時代間の連続性を新たに発見する機会が多い。特に社会学は近代以降の社会変動に注目してきたが、むしろ近代以前、近世（初期近代）の時代に、近代を動かす要素・原理が出そろう、だからこそ明治以降の西洋化・近代化がスムーズに進んだ面も大きい。日本では安土桃山時代から江戸時代がそれに当たり、ヨーロッパの絶対王政期、フランスのアンシャンレージュと重なり、比較の視座も得られた。江戸時代後期には民衆の間に旅行の文化もかなり広まり、参勤交代や城下町、伊勢参りなども含め、観光・都市研究に近世からの連続性の射程をもちえた点でも、一連の作業の意義・効用は大きいと考えている。

(4)4年目・2017年度：これまでの沖縄・ハワイ・宮崎・北海道等の観光・イメージの研究をふまえ、2017年度前半は、こうした観光開発やイメージ形成のプロセスをとらえるための理論的・歴史的なパースペクティブを掘り下げる作業を継続した。エリアスの国家形成論とブルデューの象徴資本論を結びつけて論じる中から有効な知見を引き出し、近現代の社会を近世からの長期のプロセス・連続性で見ていく視座を確立し、観光現象もそうした歴史の中に位置づけた。夏にはこれまで蓄積した理論的知見を本にまとめる作業を行い、10月に編著『社会学理論のプラクティス』を刊行した。また並行して夏には東浩紀氏の福島・チェルノブイリ関連の仕

事とマキアーネルの観光論の比較検討を行い、論考を執筆した。

『社会学理論のプラクティス』で扱う歴史の事例は主にヨーロッパだったので、後半はその知見を日本に適用し、近世の安土桃山～江戸時代にいかに国家的な枠組みが形成されたか、また参勤交代や伊勢参りによって日本の広域を移動する大衆規模の旅・観光の文化がこの時期確立し、旅・移動が国家形成に重要な役割を果たしたと、江戸への首都機能の集中や消費社会の進展、全国レベルの産業・文化のネットワーク形成などを明らかにした。明治期の鉄道事業にも注目し、徒歩による街道の旅から鉄道旅行へ移行した近世～近代の変化と連続性への認識も深めている。東海道をはじめ五街道の形成が旅・観光に果たした役割や明治期の鉄道への連続性、近世の城が果たした軍事的機能と象徴的機能の二重性、大河ドラマ等に見られる歴史メディア 観光の有機的なつながりなど、一連の作業から得られた知見の意義・効用は大きい。

以上の作業と並行して各地で現地調査も進めており、沖縄・本部半島、長野県佐久市、三重県伊勢、長崎市・島原半島、大阪、名古屋等で博物館や資料館、城跡等の見学を行い、歴史観光・戦跡観光・産業観光・コンテンツ観光などの諸実態について認識を深め、2～3か月に1回のペースで発行中の『多田ゼミ同人誌・研究紀要』に連載執筆して知見を報告し、相互に関連づけや比較が可能な知見のストックを蓄積できた。

(5)最終年・2018年度： これまで進めた各地での現地調査を継続し、神奈川・愛媛・沖縄・北海道・長崎・静岡・鹿児島などで城跡・街道・博物館等でのフィールドワークや資料収集を行い、歴史観光やコンテンツ観光の諸実態を把握し、『多田ゼミ同人誌・研究紀要』でレポートを連載し、関連づけ可能な知見のストックを蓄積できた。 並行して近世江戸期の街道、近代明治の松山を事例に論考を書き、歴史の厚みの中に旅・観光を位置づけ知見を深めた。 ドラッカーの文献を読み込み、観光にも応用できる知識社会論の視座を独自に練り上げ、12月以降5度にわたり各地の研究会で報告した。 本研究で進めてきた楽園幻想と観光開発について、ハワイ・沖縄・北海道の歴史比較をまとめる作業を行い、12月のシンポジウムで報告、2月に論文を完成させ、本研究の集大成とした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計32件)

多田治、観光開発の比較史 ハワイ・沖縄・北海道の接続、グローバル研究、査読有、6号、2019、pp.117-130

五島優子、多田治、感じる都田ツアー2019：静岡県浜松市・都田建設ドロフィーズ、多田ゼミ同人誌・研究紀要、査読無、Vol.19、2019、pp.5-20

多田治、ドラッカー本 読書ノート、多田ゼミ同人誌、査読無、Vol.18、2019、pp.82-88

多田治、もし社会学者が井坂氏のドラッカー本を読んだら 文章版～井坂康志著『P・F・ドラッカー』書評、多田ゼミ同人誌・研究紀要、査読無、Vol.17、2019、pp.63-65

多田治、北海道：冬の札幌、夏の道東、多田ゼミ同人誌、査読無、Vol.17、2019、pp.33-43

多田治、『坂の上の雲』とともに、明治の時空をめぐる松山旅行、多田ゼミ同人誌・研究紀要、査読無、Vol.16、2018、pp.47-60

多田治、石垣～西表～伊計島、2018 沖縄の夏、多田ゼミ同人誌・研究紀要、査読無、Vol.16、2018、pp.20-26

多田治、江戸時代の旅・移動 街道整備でひらかれた利便性と視覚的風景、多田ゼミ同人誌・研究紀要、査読無、Vol.15、2018、pp.52-59

多田治、城と街道：9 PLACES、多田ゼミ同人誌・研究紀要、査読無、Vol.15、2018、pp.43-51

多田治、金沢八景アルバム～開発と歴史の相即～、多田ゼミ同人誌・研究紀要、査読無、Vol.15、2018、pp.23-26

多田治、伊勢、日本のマス・ツーリズムの原点ここにあり、多田ゼミ同人誌・研究紀要、査読無、Vol.14、2018、pp.8-14

多田治、長崎と島原半島をゆく、多田ゼミ同人誌・研究紀要、査読無、Vol.13、2018、pp.61-70

多田治、『社会学理論のプラクティス』第2部歴史篇の日本への適用・導入編 社会学的近世・江戸時代論の可能性と重要性、多田ゼミ同人誌、査読無、Vol.12、2018、pp.41-45

多田治、方法としてのツーリスト再考 東浩紀の観光論とマキアーネル『サイトシーイングの倫理』の検討から、多田ゼミ同人誌・研究紀要、査読無、Vol.10、2017、pp.56-70

多田治、長野・佐久をたずねて、多田ゼミ同人誌・研究紀要、査読無、Vol.10、2017、pp.16-18

多田治、国家形成と象徴戦略 エリアスとブルデューの接続(2)、多田ゼミ同人誌・研究紀要、査読無、Vol.9、2017、pp.202-211

多田治、数年ぶりの本部半島・海洋博公園、多田ゼミ同人誌・研究紀要、査読無、Vol.9、2017、pp.73-77

多田治、エスニシティと地域社会、日本社会学会 理論応用事典刊行委員会編『社会学理論 応用事典』丸善出版(図書所収論文) 査読有、2017、pp.672-673

多田治、水俣を旅する はじめての水俣とどう向き合うか、花田昌宣他編『いま何が問われているか 水俣病の歴史と現在』くんぷる(図書所収論文) 査読無、2017、pp.165-169

多田治、宮廷社会と象徴資本 エリアスとブルデューの接続(1)、多田ゼミ同人誌・研究紀要、査読無、Vol.8、2017、pp.217-228

- ⑲ 多田治、タカラヅカ、象徴資本の集積地、多田ゼミ同人誌、査読無、Vol.8、2017、pp.45-47
- ⑳ 多田治、"特攻"を想像する 鹿児島、知覧・指宿・鹿屋への旅、多田ゼミ同人誌・研究紀要、査読無、Vol.8、2017、pp.84-90
- ㉑ 多田治、産業の光と影を観光する 四日市・名古屋訪問記、多田ゼミ同人誌・研究紀要、査読無、Vol.8、2017、pp.115-120
- ㉒ 多田治、ウォーラーステイン『近代世界システム』全1-4巻のエッセンス 彼が単なる経済史家でなく社会学者でもある理由、多田ゼミ同人誌、査読無、Vol.5、2016、pp.238-250
- ㉓ 多田治、ゾンバルトから世界システム論へ 川北稔の仕事の検討を通して、多田ゼミ同人誌・研究紀要、査読無、Vol.4、2016、pp.296-304
- ㉔ 多田治、プロセスとしての社会 ノルベルト・エリアスの社会学・文明化・宮廷社会論、多田ゼミ同人誌・研究紀要、査読無、Vol.3、2016、pp.203-215
- ㉕ Osamu Tada, Constructing Okinawa as Japan's Hawai'i: From Honeymoon Boom to Resort Paradise, *Japanese Studies*, 査読有、Vol.35-3、2016、pp.287-302
DOI:10.1080/10371397.2015.1124745
- ㉖ 多田治、ゾンバルト、その可能性の中心(1)『恋愛と贅沢と資本主義』、多田ゼミ同人誌・研究紀要、査読無、Vol.2、2016、pp.135-144
- ㉗ 多田治、グローバル・ヒストリーとジェントルマン資本主義・導入編 "象徴"の社会学の全面展開に向けて、多田ゼミ同人誌・研究紀要、査読無、Vol.1、2016、pp.88-91
- ㉘ Osamu Tada, From Hawaii to Okinawa: the Expansion of the Paradise Image and Tourism beyond Time and Place, *40 YEARS SINCE REVERSION: NEGOTIATING THE OKINAWAN DIFFERENCE IN JAPAN TODAY*, 査読有、2015、pp.261-272
- ㉙ 多田治、「日本のハワイ」としての沖縄の形成 新婚旅行ブームからリゾート・パラダイスへ、一橋社会科学、査読無、7号、2015、pp.91-104
- ㉚ 多田治、沖縄イメージ、その発生と展開～"想像の沖縄"と、方法としてのツーリスト～、想像の沖縄:その時空間からの挑戦 第5回沖縄研究国際シンポジウム報告書、査読無、2015、pp.83-90

〔学会発表〕(計10件)

- 多田治、井坂康志著『P・F・ドラッカー』のエッセンス・プラス、都田建設ドロフィーズ「ドラッカー×社会学 知識が社会をつくる」、2019
- 多田治、井坂康志著『P・F・ドラッカー』のエッセンス・プラス、日立東京シティキャンパス「ドラッカー×社会学 知識が社会をつくる」、2019
- 多田治、井坂康志著『P・F・ドラッカー』のエッセンス～もし社会学者が井坂氏のドラッカー本を読んだら～、SUNドラ読書会「ドラッカー×社会学 知識が社会をつくる」、2019
- 多田治、井坂康志著『P・F・ドラッカー』のエッセンス～もし社会学者が井坂氏のドラッカー本を読んだら～、穀菜食堂なばな「ドラッカー×社会学 知識が社会をつくる」、2019
- 多田治、井坂康志著『P・F・ドラッカー』のエッセンス～もし社会学者が井坂氏のドラッカー本を読んだら～、第17回渋澤ドラッカー研究会「ドラッカー×社会学」、2018
- 多田治、楽園幻想と観光開発 ハワイ・沖縄・北海道の歴史比較から、成城大学グローバル研究センター主催シンポジウム「グローバルな視座から問う沖縄・アジア・太平洋」、2018
- 多田治、学問とは、認識とはそれ自体、エキサイティングなひとつのカルチャーである、関東学院大学特別講義、2018
- 多田治、観光の社会学(1)観光で社会をとらえる視点と手法の深化 北海道と沖縄への歴史的アプローチから、第88回日本社会学会大会、2015
- Osamu Tada, Constructing Okinawa as Japan's Hawai'i, 国際シンポジウム HAWAII AS JAPAN'S PARADISE: CONSUMING IMAGES OF THE TROPICS, 2015
- 多田治、宮崎観光の社会学(3)宮崎から沖縄へ 新婚旅行ブームと南国イメージの系譜、第87回日本社会学会大会、2014

〔図書〕(計2件)

- 多田治編、多田治・荒井悠介・小股遼・須田佑介・永山聡子著、くんぶる、社会学理論のプラクティス、2017、191ページ(pp.3-6,25-34,101-181,189-190)
- 「水俣」を子どもたちに伝えるネットワーク・多田治・池田理知子編、くんぶる、いま、「水俣」を伝える意味 原田正純講演録、2015、160ページ(pp.129-147)

〔その他〕ホームページ等

- 『多田ゼミ同人誌・研究紀要』Vol.14 多田治ベスト総集編・著作集1 2016-17 一般公開版
<https://drive.google.com/open?id=1gtQXVHqZ1sjqAHOLK1WyxDq0xiwfl1J>
- 『多田ゼミ同人誌・研究紀要』Vol.19 多田治ベスト総集編・著作集2 2017-19 一般公開版
<https://drive.google.com/open?id=18MR1z56v0Ei81aziaTMbBS7sfoFa3V0T>
- 多田治のおしごとブログ OSAMU TADA'S WORK <https://tada8.hatenablog.com/>